

One of Ours 再考

— A Relationship without Sexuality —

角 田 俊 治

A relationship without sexuality in Willa Cather's *One of Ours*

Shunji Tsunoda

Though Willa Cather's *One of Ours*, to which she devoted four years' struggle, was awarded Pulitzer Prize in 1923, critics' evaluation has been one of the worst of her novels. But Willa Cather herself was tenacious of insisting that this was her best novel and even said that Claude Wheeler, the hero, was her best tribute to Nebraska.

The hero, the frustrated introvert living on a farm in Nebraska where the pioneering days was gone, crosses the Atlantic to participate in the First World War and, interestingly, or rather, paradoxically, fulfills his life in the war.

“Human relationships are the tragic necessity of human life,” Willa Cather once said. Thus, she is known to have harbored a strong doubt about human relationships, sexual and marital relation in particular, and therefore, though there are so many elements interwoven, we concentrate our attention on Claude's human relationship shown in this novel and illustrate how his relationship forms his life and death.

Further, we will see how the war, the worst evil, functioned as the place for a young, frustrated boy's fulfillment.

keywords : relationship, sexuality, war, Europe, civilization

下記は、実在したニューヨークの若きバイオリニスト David Hochstein が、第一次世界大戦で戦死する前に、ヨーロッパ戦線から母親に宛てた手紙の一部である。

There is much that is materialistic about the war — too much, but those who died ... have a compensation more than a mere title of hero or a posthumous service cross. ¹⁾

そしてこの手紙を読んだ Willa Cather は次のような所懐を述べている。

From a very thoughtful young man, critical by habit, a doubter of governments and religions and schools of thought, such statements mean something. They mean that something

very revolutionary had happened in Hochstein's mind; I would give a good deal to know what it was! ²⁾

かくして Willa Cather が500ページの長編 *One of Ours* で示そうとしたのは Hochstein の言う “戦死者たちの compensation” とは何か、そして彼の中に起こった “something very revolutionary” は何かということであった。そのために彼女は中西部の若者 Claude Wheeler を創造し、*One of Ours* という文学作品を仕立て上げたわけである。ここに本小説のテーマ、つまり主人公 Claude Wheeler の quest for value のテーマが存在する。Claude が探し続け、欧州戦線で発見したもの、彼の言う “something splendid in life” とは如何

なるものだったかを提示するのが本論の主意である。

1918年、大戦中のヨーロッパ戦線で死亡した従弟の G.P. Cather が戦地から家族に宛てた手紙を見て、Willa Cather は “farm boy” に過ぎなかった従弟の心理的な成長とその行き着いた境地に驚かされた。同年、彼女は面識のあったニューヨークのバイオリニスト David Hochstein が戦地から New York Times 紙に送ったレポートを読み、翌年1月には同紙で彼が地雷に触れて爆死したことを知る。Hochstein が母親に宛てた幾通もの手紙を読む機会を与えられた彼女は、これら二人の “intellectual and emotional maturity” と、彼らをかくも急激に変貌させた “war and the army and France”³⁾ に対して強い興味を抱き、これらを芸術の素材とした作品の構想を膨らませた。

こうして “世界が二つに分かれた”⁴⁾ 1922年、Willa Cather は3年以上の心血を注いだ後、前作 *My Antonia* のほぼ2倍に及ぶ長編 *One of Ours* を世に出し、翌年 Pulitzer 賞を受賞することになる。しかしながら早くも1925年の Edmund Wilson による “Miss Cather's new novel — *One of Ours* — seems to me a pretty flat failure.”⁵⁾ という批評に代表されるように、本作に対する批評家たちの評価は彼女の期待と意気込みとは逆のものであった。一方、友人に対して *One of Ours* は Nebraska への “the best tribute” であると自ら語ったエピソードに示されるように、Cather 自身が本作に自信と誇りを持ち、これらの批評と非難を不当と考えていたのも事実である。本論では D. P. Stevens の言葉を借りるなら、“largely neglected”⁶⁾ である長編 *One of Ours* に向けた作者の意図とその文学的価値を検討する。

... human relationships are the tragic necessity of human life; that they can never be satisfactory, that every ego is half the time greedily seeking them, and half the time pulling away from them. In those simple relationships of loving husband and wife, affectionate sisters, chil-

dren and grandmother, there are innumerable shades of sweetness and anguish...⁷⁾

これは Willa Cather 研究において頻繁に引用される *On Writing* の一節であるが、これを *One of Ours* の解釈に当てはめると極めて示唆に富む。作者が “human relationship” の中でも男女の関係、とりわけ結婚を含めた sexuality を基盤とする関係に強い疑念を持っていたことは周知の事実である。*One of Ours* をこの視点から分析し、作者の言う、“husband and wife, affectionate sisters, children and grandmother” の関係を越えた、理想的な人間関係を象徴的に提示したのものとして読めば、作者の本作に向けた意図が顕われてくるのである。

Heywood Brown の “... as if the purpose of the war was ... to get farm boys out of Nebraska ...”⁸⁾

という一文に見られるように、批評は作者の戦争の取り扱いに関するものが中心である。これらに対して作者は彼女らしい言葉で反論している。

... if a story happens to touch upon one's political opinions they cannot see it as an imaginative thing at all.⁹⁾

本作品が war novel を目指したのではなく、一人の若者の精神的軌跡を描こうとしたものであることは、作者が “Claude” というタイトルで書き始めながら、出版社の意向を受け入れて *One of Ours* と変えてしまったことを大いに後悔した事実からも明らかである。

ストーリーは故郷ネブラスカで不満と絶望の人生を送っている主人公 Claude Wheeler が、第一次世界大戦中のヨーロッパに赴き、そこで自らの人生の fulfillment を得たことを自覚し、満足のうちに戦死するというものである。戦争という人類最大の愚行が、Claude という事実上死にかけていた若者の再生の場となるというパラドックスがそこにある。そこに示された作者の意図は何であろうか。

開拓時代の終焉を迎えている中西部のネブラス

カの Frankfort に住む Claude Wheeler の人生は幻滅と不満のそれである。家族ですらそれぞれが、作者自身の嫌悪する商業主義、機械文明、さらには偏狭なキリスト教信仰などを代表し、Claude の幻滅を助長する。かつてはこの町を築いた開拓者の一人でありながら、今は典型的な snob となってしまった父親、商業主義を代表する兄、そして機械マニアの弟のいずれもが、Claude の人生を孤立させる。“physical ache”を感じるほどに Claude を愛している母親も、教会への極端な帰依のために結果的に Claude の人生を束縛している。ちなみにこの母と子の関係はキャザーの意識を分析するのに示唆的である。母と息子との愛情は読者に感動と感傷のいずれをも与えるような表現で記述されるが、たとえば “It is almost like being a bride, keeping house for just you, Claude.”¹⁰⁾のごとき一文に、男女関係に対して持つ作者の疑念が微妙に投影されているのは読み取る必要がある。作者は結婚というつながりよりも強い本質的な人間関係の存在を示そうとしているのである。

Frankfort の町で Claude の意識と性格そして彼の frustration の本質を Claude 以上に理解している唯一の人物は学校教師の Gladys Farmer であり、しかも彼女は密かに彼を愛している。だが奇妙なことに、彼が Enid Royce という fanatic なまでに信仰心の強い女性と結婚するのを知った時 Gladys の感じるのは失恋の痛みではなく “Everything that was Claude would perish.” (176) という嘆きである。作者は主人公が一般的な意味での恋愛をすることを許さないのである。では “Everything that was Claude” とはどのようなものか。

“violent temper and physical restlessness” が彼の子供時代の特徴であったと作者は言う。だがその子供時代においても、水車が取り壊されるのを嘆く姿に象徴されるように、彼の内部には極端なまでに繊細な感受性と romantic な性格がある。自分が生まれる前の古き良き開拓時代を憧憬し、snobbery と商業主義の支配する現在に幻滅する Claude の求めるものは、彼の言葉を使えば

“something splendid in life”であり、そして“the need to admire”である。だがそれはもはや Frankfort の農場には存在しない。

ネブラスカの物質主義的現状から家族関係まで含めた、自分を取り巻くあらゆるものに不満と幻滅を抱きながらも彼は、“physical test and penances”を自らに課すことによって、寡黙と自制心を身につけていくが、それは必然的に彼の内部で dejection が益々蓄積されていくことを意味する。自分のいるべき場所が見つからないのである。

The thing that hurt was the feeling of being out of it, of being lost in another kind of life in which ideas played but little part. (97)

彼の絶望の極は、Denver の the State House を訪れる時の描写で示される。しかもそれはタイトルに彼が結婚する相手の女性の名前を付した Book II: “Enid” の冒頭の部分で極めて象徴的に起こる。彼は突然 “the feeling of being unrelated to anything, not mattering to anybody” (135) という耐え難い寂寞と絶望感に襲われる。古き良き西部開拓時代の終焉が Willa Cather 自身によって宣言されるのはこの場面である。西に向かう馬上の Kit Carson の像を見ながら Claude は “... but there was no West ... any more.” (137) と結論づける。西に Paradise がなければ彼は東へ向かうしかないが、それは第4章まで待たねばならない。3人称で書かれているとは言え、One of Ours の大部分は introvert の主人公 Claude Wheeler の内面を描いており、読者は物語の大部分を彼の目を通して、また彼の心理を通して見ることになる。ところがこの Denver 訪問の最後の場面だけは、通りすがりの人物の目を通して Kit Carson の像の前に立ちつくす Claude の姿が描写される。

The stranger scrutinized Claude with interest. He saw a young man standing bareheaded on the long flights of steps, his fists clenched in an attitude of arrested action—his sandy hair, his tanned face, his tense figure copper-coloured in the oblique rays. (137)

さて、このように殆ど死にかけている若者が、最後に求めるのは必然的に女性である。自動車に驚いた口バの為に有刺鉄線で顔に大けがをした Claude は Enid Royce という粉屋の娘の訪問を受けるようになる。Enid は極端に偏狭な宗教心を持つ女性であり、その信仰心は *frigidness* と表裏の関係をなすが、孤独な彼には宗教的な博愛行為と恋愛との区別がつかず、Enid を理想化し彼女との結婚に生きる意味を見いだそうとする。象徴的なことであるが、忌み嫌う “Clod” という発音で彼女に自分の名前を呼ばれても気づかない。結婚の “*transformational power*” を信じる彼は Enid 自身の “*Marriage is for most girls, but not for all.*” という理にかなった警告も無視して半ば強引に結婚までことを運ぶ。

彼が繊細で傷つきやすい精神と強靱な体躯の両方を持ち合わせていることが、その性格にある欠陥を作り出していることに注目しなければならない。

The talk of the disreputable men his father kept about the place at home, instead of corrupting him, had given him a sharp disgust for sensuality. (67)

このように彼の中には性というものを恐れ、嫌悪する意識が存在しており、結果として女性の真実の姿を見ることができない。故に彼は女性を *sexuality* を持った女として見る限り、愛することができないのである。一方、女性との間に *sexuality* のない関係を築こうとすればそれは恋愛ではなくなる。“*clinging contact*” に不純なものを感じる彼と Gladys Farmer との間に恋愛関係が成立しなかったのもそこに起因している。

彼の Enid を見る目の不確かさは次の描写に象徴されている。

... lying flat in bed, his head and face so smothered in surgical cotton that only his eyes and the top of his nose were visible. (159)

Enid の信仰心が “*natural fragrance*” に見える彼には Enid の真の姿がみえないのであるが、実はこの段階の彼には自分自身の姿も見えていな

い。見落としてはならないのは Claude が意識するとせざるとに関わらず、その鍛え上げた肉体の中に性欲は存在することである。先に述べたように無意識レベルでの彼の Enid への思いは、実は結婚前においても性的である。下記のような官能的、性的な表現を用いることによって、Claude の意識が描写される。

... the thought of Enid would start up like a sweet, burning pain, and he would drift out into the darkness upon sensations he could neither prevent nor control. (166)

彼は夢の中で Enid に会いに行こうとして突然自分が素裸であることに気づき、“*Adam in the garden*” のように木の葉で自分を隠す。

結婚後も二人の間には性生活はない。かくして結婚生活も彼の救済とはならず、かえって自らの不満と怒りに性的要素を加えてしまう。彼の人生がより惨めで孤独なものになったことは、“*timber claim*” での姿に示されている。彼の唯一の “*diversion*” は一人森に入り “*unmarried and free*” を感じて、心ゆくまでたばこを吸いながら一人次のような夢想をすることだというのである。

Some of his dreams would have frozen his young wife's blood with horror. (240)

つまり性的に女性を求める欲求と、Enid から解放されたいとする願望が奇妙に併存している矛盾に満ちた状態なのであり、必然的に彼のやり場のない *repugnance* は高まっていくのである、結婚関係を人生の罨だと考えていた Willa Cather は勿論この二人に幸せな結婚生活など与えない。Enid はその病的なまでに潔癖で *frigid* な性格と *religious fanaticism* を露わにしていく。

ここで Cather はご都合主義的プロットを用意する。中国で布教活動をしているという姉が病氣になり、彼女は Claude をおいて東洋に旅立ち、これ以降二人が出会うことはない。Claude は心の奥で密かにこの事態を歓迎する。

“Let her go! Let her go when she could!” (248)

今や彼には Enid から解放されることが *salva-*

tionなのである。しかも、Claudeの不毛の結婚についての記述を中心とするBook IIに“Enid”というタイトルが付けられているのに対し、彼女が去っていくBook IIIは何と“Sunrise on the Prairie”というタイトルなのである。先に述べたようなWilla Cather自身の結婚観がここに反映されているのは間違いない。

Catherの友人でもあり、彼女を高く評価していたSinclair Lewisは“The most important defect is that, having set the Enid problem, she evades it.”¹¹⁾と述べて批判しているが、確かにEnidの問題は最後まで未解決のままである。だが、EnidとClaudeの関係という特殊な問題を作者が意識的に“evade”したというのは当たっていない。繰り返し述べるように、もともと結婚に強い疑念を持っていた作者の意図は、この結婚がClaudeの孤独と不満を増すだけだったことを強調し、結局は妻Enidも“transformational power”とはならなかったことを示すことであり、さらには結婚生活がかえって人生の畏となるという作者の哲学を示す意義もあった。作者がClaudeに性を媒介とした男女関係とは全く違った、彼の満足する人間関係を与えるのは終章まで待たねばならない。

さて、Enidは中国に去るが、彼女の去った方向と反対のヨーロッパから、アメリカ大陸のはるか奥にあるこのネブラスカまで大戦の様子とドイツ軍の侵攻の状況が伝わるようになり、人々の戦争の話題も頻繁になってくる。

彼は第一次大戦中のフランスに渡り、驚くべきことに、戦争という極限状態の中で“perfect bliss”なるものを感じ、陶酔と昂揚のうちに戦死する。HemingwayはCatherの描く戦闘場面を評して、“Poor woman, she had to get war experience somewhere.”¹²⁾と嘲笑したが、確かに女流作家の描く戦争場面の迫真性の欠如や非現実性を指摘するのは容易である。登場人物たちの戦場での会話が典型的で時には陳腐でさえある事実も否定できない。しかしながら、本稿では戦争がいかにしてClaude Wheelerのfulfillmentの場となり得たかを検討することが論点となる。

Enidとの生活から解放された彼は軍隊に入り、ついには大西洋を越えてヨーロッパに渡り、“Clod”から“Claude”への急激なtransformationを遂げていくことになる。結婚では得られなかった“transformational power”なるものを、何と軍隊生活とヨーロッパ戦線で獲得する。親兄弟との家族関係及びEnidとの結婚が彼のdejectionを増すものであったことは今まで見た通りである。しかも結婚という男女関係が彼のsexualityを満たすこともなく、また彼の鬱積した心理を慰労することもなかった。その彼が完全な男だけの世界である軍隊での“human relationship”に歓喜するのである。

Claude loved the men he trained with — wouldn't choose to live in any better company.
(281)

彼はヨーロッパへ向かう船上にある。彼の享受する解放感は無無論過去の閉塞状況の裏返しである。

Two years ago he had seemed a fellow for whom life was over; driven into the ground like a post Yet here they were. (318)

では、彼が際限のない自由を感じる船上とはどのようなところであろうか。実はそこは戦場に劣らぬ極限状況の場所なのである。Book IV: The Voyage of the Anchisesは実在したある軍医の船上日記をベースにCatherが脚色したものである。船上で悪性のインフルエンザが発生し兵士たちの多くが死んで海の中に捨てられていく。強靱なClaudeはここで軍医を助け全力を傾けて病気の兵士たちの介護にあたる。彼は初めて意味のある役割を持った他から必要とされる存在となり、この船上が彼の再生のはじまりとなっていくのである。危機的状況になればなるほど、彼は自己の存在に自信を深めて行く。

He was enjoying himself and didn't want to be safe anywhere. ... life had never seemed so tempting as it did here. (347)

彼の“the tingling sense of ever-widening freedom”が何よりEnidとの結婚生活からの解放を

意味しているのは、作者の結婚観のみならず本作に含めた作者の意図を知る上でも重要である。彼は“the happy feeling that he was the least married man”を絶えず享受しながら船上の病気の兵士たちの間を忙しく歩き回るのである。

Enid's pale, deceptive face seldom rose before him. (340)

こうして過去と決別した彼は戦時下のフランスにやってくる。

作者が本作の執筆に取りかかったのは大戦終結前の1918年、そして完成したのは1922年であり、第一次世界大戦の全体像とその歴史的意味合いを把握できないままに執筆している面があり、このことを考慮に入れば John H. Randall の次の指摘は一面で正しい。

Willa Cather apparently shared the general Allied indignation at the alleged German atrocities.¹³⁾

だがこの作品の背景となる戦争はあくまで、Claude Wheeler という、“rough-neck”、“neither very old nor wise”¹⁴⁾で、introvert の若者の心理を通して記述されるところの、彼の経験としての戦争なのである。作者が意図しているのは Claude のドイツ軍との勇猛果敢な戦闘を描くことではなく、彼の旧大陸ヨーロッパでの文化や芸術との出会い、そして sexuality を含まない友情としての human relation に力点を置くことなのであって、これらの“values”を彼は第一次大戦中のフランスで発見し、それを守るために戦うことこそ自分の生き甲斐 (“something worth living for”)、もしくは命を賭してもいいものと考えるのである。

Francofilia Willa Cather の創造した Claude の目から見たフランスの描写はフランス人批評家も戸惑わせる程のものである。

... unless he [a French reader] is particularly chauvinistic, he is aware that he is presented with an idealized vision of his country.¹⁵⁾

Claude が船上から初めてみたフランスの姿は彼の意識を根底から覆す程のものであった。

... he had never seen anything that looked so strong, so self-sufficient, so fixed from the first foundation, as the coast that rose before him. (356)

こうしてヨーロッパの伝統と文化に陶醉した Claude の大義が生まれるわけであるが、それがどのような形で“human relations”の中に織り込まれているのであろうか。

先に述べたように、Lieutenant David Gerhardt は実在した若いバイオリニストをモデルとして作者が創造した人物であり、本作品の中で主人公の次に重要な役割を持つが、Claude は大戦の中でその彼と知り合い、彼との交友を通じて quest for value を行う。

David Gerhardt と初めて出会った時に本能的に感じる“he [Claude] must be on his guard and must not let himself be patronized”という直感が Claude の生と死に意味づけを与え、彼の人生を決定することになる。“on his guard”となることが Claude にとっていかなる意味を持つのか、それが Claude の大義とどのように関わってくるのかを見ることが本論の結論となる。ここで心に留めておくべきことは、Claude のフランスでの quest for value が進行して行くとき、その背後には常に砲声 (“the sound of big guns”) が聞こえているという事実である。

Gerhardt に紹介されて Claude はフランスで幾人かの女性たちと交友を持つが、そこには性的関係も恋愛も決して存在しない。終章における最も重要な女性の登場人物は赤十字で働く Mademoiselle Olive de Courcy であり、Claude は彼女の中に“a perfect lady”となるものを見るが、二人の間に通常の男女が当然持つはずの恋愛関係は全く生まれぬ。作者がそれを許さないのである。ところが Claude はこの形態の交友に完全に満足する。注目すべきは彼のこの sexuality 無き交友の中で、Enid の記憶を完全に失いつつある点である。それを象徴する場面がある。Mille Olive に対し、彼は両親のこと、ネブラスカの四季、corn-field の様子を自らも驚くほど詳細に語って聞か

せる。だがそこに妻 Enid は出てこないのである。

The sunlight on the floor, the bundles of fresh flowers, the white window curtains stirring the breeze, reminded Claude something, but he could not remember what. (430)

この “something” が花と白い服を好んだ Enid の記憶の断片を読者に示唆していることは明らかであるが、彼はもうその記憶をほぼ完全に消し去っている。不幸な結婚という呪縛から完全に解放され、彼の性的 frustration は昇華されているのである。このように Willa Cather が *One of Ours* で示そうとする理想的な human relationship とは、あくまでも sexuality とは無縁のものなのである。

ところで、彼がまだ Lincoln の church college で鬱積した学生時代を過ごしていたころ、求め続けていたものの一つは、“admire” することの出来る人物に出会うことであった。

Now, he believed that even then he must have had some faint image of a man like Gerhardt in mind. It was only in war-times that their paths would have been likely to cross ... (466)

戦争が二人の運命を交差させたのである。artist-intellectual である David Gerhardt との出会いと友情、そして彼に象徴される civilization の世界は Claude がヨーロッパ戦線で見つけた最大の喜びである。家族も妻も与えてくれなかった human relationship の喜びを David との友情の中に見いだすのである。彼は他のアメリカ兵たちのようにフランス娘たちと森で “mushroom hunting” を楽しむこともせず、ひたすら芸術の世界で生きてきた Gerhardt との交友と Gerhardt が導く世界にこの上ない喜びを見いだす。

さて、*One of Ours* のクライマックスは、戦死した友人の家族から頼まれて、彼の姉の弾くピアノに合わせながら、David Gerhardt がその友人のバイオリンを引く場面である。“generous admiration, and bitter, bitter envy” に引き裂かれながら、Claude は Gerhardt のバイオリンを聞く。それは今まで自分の生きてきた世界とはあまりにも

違った世界のものであった。

What would it mean to be able to do anything as well as that, to have a hand capable of delicacy and precision and power? (468)

だが、ここにも夜の闇を通して砲声が聞こえてくる。バイオリンの響きと砲声の並立が象徴するものこそ、作者 Willa Cather が *One of Ours* において読者に示す最大のモチーフである。ここにおいて Claude は自分の果たすべき役割を完全に理解する。それは David Gerhardt と彼の背後にある世界を守ること、さらにはそのために自らの命を投げ出すことなのである。砲声を聞きながら Gerhardt と Claude が行う会話は、*One of Ours* の解釈にとって決定的な重要性を持つ。二人は全く逆のことを考えるのである。Gerhardt が言う。

“Listen ... That's all that matters now. It has killed everything else.” (469)

Claude は次のごとく反論する。

“I don't believe it. ... It's men like you [Gerhardt] that get the worst of it, ... But for me, I never know there was anything worth living for till this war came on. Before that the world seemed like a business proposition.” (469)

ここに Claude の quest for value の到達点がある。砲声を聞きながら彼は考える。

The sound of guns had from the first been pleasant to him, had given him a feeling of confidence and safety; to-night he knew why. What they said was, the men could still die for an idea; and would burn all they had made to keep their dreams. He knew the future was safe ... Ideals were not the archaic things, beautiful and impotent; they were the real sources of power among men. As long as that was true, and now he knew it was true — he had no quarrel with Destiny. (470)

Claude と Gerhardt の relationship に示された Willa Cather の意図を集約したのがこの一節である。芸術家 David Gerhardt にとって砲声は破壊の

音、彼の芸術及び西洋文明を崩壊へと導こうとする音である。ところが Claude Wheeler にとっては砲声はそれらを “guard” する響きなのである。

かくして、Gerhardt を守ることの意味が確定する。Gerhardt に出会った瞬間から “on his guard” の義務を Claude が本能的に感じたことは先に述べた通りである。作者が Gerhardt を通じて示そうとしたものは芸術と文化つまり civilization の世界なのであり、そこは普遍性と永遠性をもつ “idea” の世界でもある。Claude が “on his guard” となることは物質主義的世界の中において “idea” の世界を守ることであり、それが彼にとって “ideals” に身を捧げるということになるのである。このことを認識した彼は自分に託された “Destiny” を知り、Gerhardt に対する “envy” から解放される。それどころか “He would give his own adventure for no man.” と思うに至り、自己の生命とその存在の意義を実感するのである。見てきたように、Claude と Gerhardt の戦争観は完全に逆であるが、二人は守る側と守られる側にあり、切ることでできない運命的な糸で結ばれている。作者が男と男の友情という形で象徴的に示そうとしたのは二人のこのような human relationship なのであり、それは作者 Willa Cather から見ればいかなる男女関係よりも強いつながりなのである。

最後に Willa Cather の戦争観について少しく述べる。

本作 *One of Ours* には作者がその戦争観に対して批判を受けてもやむを得ないと思われる箇所がある。作者は自らの作品群の多くの箇所では人間の意志の力と “desire” への信頼を述べる。これは彼女の哲学と言ってもいい。その意識の顕れた以下の場面は、彼女の “romantic disposition of war” を疑われてもやむを得ないものとなっている。Mlle Olive は Claude に述べる。

“They [the people] must love their country so much, don't you think? If they have the ground and hope, all that they can make again.

This war has taught us how little the made things matter. Only the feeling matters.”

(432)

この言葉に Claude は感動する。

Exactly so, hadn't he been trying to say this ever since he was born? Hadn't he always known it, and hadn't it made life both bitter and sweet for him? (432)

この場面に遠くから砲声が聞こえてくる。自らの戦争の正当性を信じて疑わない Claude には遠くの砲声が “pleasant” に聞こえる。この砲声が人類の未来を守っているという安心感を与えるというのである。ここに作者の見落としがあることに気付く。作者は “the made things” は破壊されても “the ground and hope” があれば再生できるという。だが戦争という蛮行は “the made things” の破壊以上に、何よりも human lives の破壊である。“the ground” はあっても “hope” の持ち主たる人間が殺されるのが戦争である。Claude の意識の中に、そして作者自身の意識の中に、その砲声の下に血にまみれた多くの死体が散乱している映像はない。

Stanley Cooperman は Claude には “war lover” としてのあらゆる特質が備わっていると主張する。¹⁶⁾ 作者が Claude Wheeler を、しかも自分のイニシャルを入れ替えて名付けた主人公を、意識的にそのように創造したとは全く考えられないが、戦地での Claude の心理が結果としていわゆる war lover のそれであることは否定できない。

しかしながら、作者が戦争というものを “glorify” しているという批判に対しては、明確に否定してよい。この意味では出版の翌年の1923年、Pulitzer 賞受賞後に出た New York Times の書評が今なお最も公平である。

She knows as well as any of them [other authors] that the war has “horrors,” and doubtless she hates it as much as any of them; certainly she does not laud it as among the more commendable of human activities. But she is a little of a pacifist as of a militarist; she is a

sane woman who understands that there are worse things than war.¹⁷⁾

果たして“worse things than war”が本当に存在するかは別問題であるが、Willa Catherが自分のイニシャルを逆にして創造した Claude Wheeler に第一次世界大戦についての見解を伝える agent の役割をさせたわけでは決してないのである。最初に意図していた“Claude”というタイトルを、出版社の要請で変えてしまったことを作者が後悔していた事実を思い出すべきである。

注

- 1) L. Brent Bohlke (ed.), *Willa Cather in Person* (Lincoln: University of Nebraska Press, 1986), p. 56
- 2) L. Brent Bohlke, *op.cit.*, p. 56
- 3) E. K. Brown, *Willa Cather: A Critical Biography* (New York: Alfred A. Knopf, 1970), p. 215-216
- 4) Willa Cather, *Not Under Forty*
- 5) James Schroeter (ed.), *Willa Cather and Her Critics* (Ithaca, New York: Cornell University Press, 1967), p. 25
- 6) D. P. Stevens, *Willa Cather and the Art of Civilization* (Michigan: UMI, 1992), p. 122
- 7) Willa Cather, *On Writing* (Lincoln: University of Nebraska Press, 1988), p. 109
- 8) John J. Murphy (ed.), *Critical Essays on Willa Cather* (Boston: G.K.Hall&Co., 1984), p. 5
- 9) Susie Thomas, *Willa Cather* (Houndmills: Macmillan Education Ltd., 1990), p. 45
- 10) Willa Cather, *One of Ours* (Kyoto: Rinsen Book Company, 1973), p. 92以下の *One of Ours* の引用はすべてこの版により、括弧内に頁番号を示す。
- 11) James Schroeter, *op.cit.*, p. 31
- 12) James Woodress, *Willa Cather: Her Life and Art* (New York: Pegasus, 1970), p. 193
- 13) John H. Randall III, *The Landscape and the Looking Glass: Willa Cather's Search for Value* (Westport, Connecticut: Greenwood Press, Publishers, 1960), p. 168
- 14) Susie Thomas, *op.cit.*, p. 43
- 15) Bernice Slote and Virginia Faulkner (ed.), *The Art of Willa Cather* (Lincoln: University of Nebraska, 1974), p. 65
- 16) John J. Murphy, *op.cit.*, p. 169
- 17) L. Brent Bohlke, *op.cit.*, p. 57